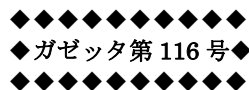


# メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(24)

## 第116号～第120号(2015年11月5日～12月15日配信)

配信した「ガゼッタ」No.116-120のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdfにしました。



### ◆ガゼッタ第116号◆

ガゼッタ第116号をお届けします。

本号は、「11月例会の来場御礼」、「ロッシーニ新譜：ゼツダ指揮《オテッロ》CD発売!」、「イル、バービール、ヂー、セヴキグリア…日本における《セビーリャの理髪師》受容の諸相(3)」をお届けします。

なお、協会ホームページの「ガゼッタ統合版」の頁に「第101号から第105号のまとめ(21)」と「第106号から第110号のまとめ(22)」を掲載しました(11月2日アップ)。

「ガゼッタ」統合版の頁はこちら→ <http://societarossiniana.jp/lagazzetta.html>

### ▼11月例会の来場御礼▼

去る11月3日(火・祝)、今年最後の例会「美食家ロッシーニの真実」(講師:水谷彰良)を実施し、39名のご来場をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

事前に二つのドキュメンタリー(「料理人ロッシーニ」「厨房に入った作曲家」)を視聴すると告知しましたが、新たに4種の美食家ロッシーニを扱ったTV番組を加えて過去25年間に作られた合計6種の映像を紹介し、ロッシーニの美食に関する虚実を明らかにするとともに、彼の美食が個人的な趣味にとどまらずイタリアの食材とその新たな調理法をヨーロッパに広める役割を果たしたことが話されました。

次回例会は年明けの2016年1月17日(日)、いつものように北沢タウンホール3Fミーティングルームで行います。内容は決まり次第、メルマガと協会ホームページで告知させていただきます。

### ▼ロッシーニ新譜：ゼツダ指揮《オテッロ》CD発売!▼

#### ◎Rossini: Otello (Opera Vlaanderen 2014 Live)

ロッシーニ：歌劇《オテッロ》2014年2月フランダース・オペラ上演ライブ録音  
アルベルト・ゼツダ指揮フランダース・オペラ交響楽団&同合唱団 グレゴリー・クンデ(T/オテッロ)、カルメン・ロメウ(S/デズデーモナ)、マキシム・ミロノフ(T/ロドリゴ)、ロバート・マクファーソン(T/イアーゴ)、ラッファエッラ・ルピナッチ(Ms/エミーリア)、ヨーゼフ・ヴァーグナー(B-Br/エルミーロ)、マールティン・ハイルマン(B/ヴェネツィア総督)、シュテファン・アドリアエンス(T/ゴンドラ漕ぎ)  
録音：2014年2月アントウェルペン Dynamic CDS 7711/1-3 (CD3枚組)



2014年2月にベルギーのアントウェルペン歌劇場で行われた上演のライブ録音。これはゼツダ先生と園田隆一郎さんのダブル指揮で行われましたが、CD化されたのはゼツダ先生の公演日です。オテッロがグレゴリー・クンデなら期待して当然。ロドリゴはお馴染みミロノフ君。デズデーモナの昨年8月のROF《アルミダ》タイトルロールを歌ったカルメン・ロメウ。その首尾や如何に…と書きたいのですが、このところ例会の準備や雑誌原稿が立て込んだ関係でじっくり聴く時間がありません。仕事の合間に流し聞きしましたが、それで感想を書くのは演奏者に失礼なのでやめておきます。でも、「近年のフランダース・オペラにおけるロッシーニ上演と同程度のレベル」と言っておきましょう。

### ▼イル、バービール、ヂー、セヴキグリア…日本における《セビーリャの理髪師》受容の諸相(3)▼

ロッシーニのオペラ紹介が明治末に始まり、安藤弘『歌劇梗概』(明治39年)と柴田環『世界のオペラ』(明治45年)の2著があることは協会ホームページ掲載の拙稿「日本におけるロッシーニ受容の歴史—明治元年から昭和43年まで」に書いたので繰り返しません。でもどちらも作曲家に関する伝記的記述は無きに等しく、あらずじ本の域を出ません。では、ロッシーニに関する最初のまとまった紹介は、誰がどこでしたのでしょうか。

現時点でこれが最初かな、と筆者が考えるのが明治40年12月に出版された『泰西音楽大家伝』です(細貝邦太郎/有沢潤編。中川書店)。同書は「シャープ氏の作曲大家列傳、大英百科全書等二三に基きて編纂」され、基本的には英文で書かれた文章の翻訳に当たります。ヴァーグナーとグノーまで29人の略伝で構成されており、イタリア人はパレストリーナからドニゼッティとベッリーニまで10人が取り上げられています。ロッシーニのことはフルネームを「ギオアシノ、ロシニー」と表記し、全19頁を費やして紹介しています。

面白いのはオペラの題名を、すべてカタカナと原語で表記すること。《セビーリャの理髪師》は「イル、バービ

ール、ヂー、セヴキグリア (Il Barbiere di Siviglia)」とあり、縮めて「イル、バービール」とも書かれます。ちなみに《イングランド女王エリザベッタ》は「エリサベッター、レギナ、ダンギルテツラー」と表記されます。

作曲者の名前は「ロッシーニ」がロッシーニとすぐ想像がつかますが、「シマロサ」「シエルビニ」「ドーニチエチ」となると誰それ？ではないでしょうか…チマローザ、ケルビーニ、ドニゼッティのことです。

これってクイズになりますね。では皆さんに出題します…この本に書かれている次のロッシーニ作品を現代の訳題で教えてください…

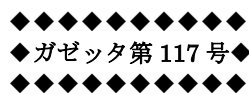
- (1) アデレーダ、ヂー、ボルゴグナ
- (2) ル、シエージ、ド、コリンズ
- (3) イル、ヴキアジオ、ア、レイム

答えは、(1) ボルゴニーのアデライデ (2) コリントスの包圍 (3) ランスへの旅です。

頁を繰っていると、「イル、クラチアト、イン、エギトー」「デル、フリゲンデー、ホルレンデル」「ダス、ウオールテムペリテー、クラヴキール」といった表記が出てきます。《エジプトの十字軍》《さまよえるオランダ人》《平均律クラヴィール曲集》がそれ。明治時代の音楽愛好家は、一生懸命カタカナ題名で覚えたのでしょうか？

本日はこれにて失礼いたします。

(2015年11月5日 水谷彰良)



ガゼッタ第117号をお届けします。

本号は、「未聴のロッシーニ新譜：ナナシ指揮《泥棒かささぎ》CD発売!」、「12月12日、マイヤペーア《悪魔のロベール》日本初演!」、「ボオマルセエの劇『セ井`ルの理髪師』の初版…日本における《セビーリヤの理髪師》受容の諸相(4)」をお届けします。

なお、次回例会は2016年1月17日(日)、北沢タウンホール3Fミーティングルームで行います(内容未定)。

#### ▼未聴のロッシーニ新譜：ナナシ指揮《泥棒かささぎ》CD発売!▼

◎Rossini: Die Diebische Elster (La gazza ladra) (2014 Live)

ロッシーニ：歌劇《泥棒かささぎ》2014年4月フランクフルト歌劇場ライブ録音  
ヘンリック・ナナシ指揮フランクフルト歌劇場管弦楽団&同合唱団 ズフィー・ペーヴァン (S/ニネッタ)、ジョナサン・レマル (B/フェルナンド)、フランシスコ・ブリート (T/ジャンネット)、フェデリコ・サッキ (B/ファブリーツィオ)、カタリーナ・レオゾン (Ms/ルチーア)、シム・キーワン (B-Br/ゴツタルド)、ニッキー・スペンス (T/イザッコ) 他

録音：2014年4月フランクフルト歌劇場 Oehms OC961 (CD3枚組)



「未聴の」と頭に記したのは、まだ買ってないからです。基本的にロッシーニ新譜は序曲集を除いてすぐ購入するのですが、毎月買うべき研究資料が多いので見送りました。とはいえ発売済みの新譜とあって、リリース情報だけ記しておきました。歌手の顔ぶれで食指が動かないのは筆者だけ？

ちなみにフランクフルト歌劇場では今年12月11日から来年1月8日にかけて、指揮者とキャストを変えて再演されます(6回公演。サグリバンティ指揮)。

フランクフルト歌劇場の《泥棒かささぎ》再演情報はこちら↓

<http://www.oper-frankfurt.de/de/page1020.cfm?stueck=723> (ドイツ語)

#### ▼12月12日、マイヤペーア《悪魔のロベール》日本初演!▼

G.マイヤペーア作曲 歌劇「悪魔のロベール」(日本初演)(全5幕/日本語訳詞上演)

2015年12月20日(日)午後1時30分開演

多摩市立複合文化施設“パルテノン多摩”大ホール(小田急・京王・多摩モノレール「多摩センター」駅下車徒歩5分)  
(全席指定) S席 3,000円/A席 2,500円/B席 2,000円

チケット販売：音楽教育社 042-385-7357、チケットぴあ 0570-02-9999

芸術監督/演出：八木原良貴、指揮：野町琢爾、ガレリア座管弦楽団 ガレリア座合唱団 ガレリア座バレエ団  
キャストは下記サイトからご覧ください。

これは驚きました。マイヤペーアのグラントペラ《悪魔のロベール》が日本初演されるのです(ガレリア座第27回公演、12月12日パルテノン多摩 大ホール)。筆者はガレリア座に関する知識がなく、出演者に知己もいませんが、お知らせしないわけにはいきません。

主催団体のガレリア座は1993年創立。「ソリスト、オーケストラ、合唱、バレエ、指揮、演出、美術、制作に至るまでアマチュアの団員でまかなう日本でも数少ない本格的なアマチュア・オペラ団体」で、「ふだんは社会人、主婦、学生」のメンバーがすべて手作りするというから驚きです。もう一つの驚きは、なんでも訳詞上演するらしいこと。上演歴を見ると《イル・トロヴァトーレ》も《運命の力》も自前で訳詞を作っています。今回はガレリア座バレエ団の名称もあるので、バレエをカットせず全5幕を上演するのでしょうか…《ギヨーム・テル》並に本編3時間半かかる大作なのですが…

快挙それとも暴挙？ 怖いもの見たさで行くべきか否か…思案中です。

ガレリア座による「悪魔のロベール」特設サイトはこちら→ <http://robert-galleria.info/>

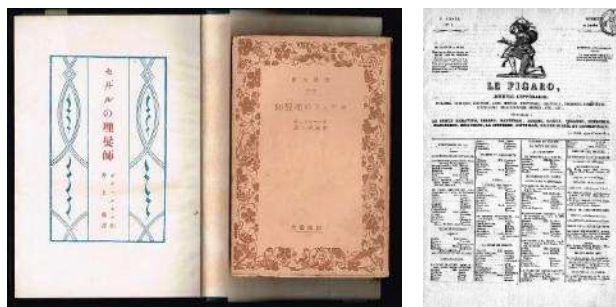
#### ▼ボーマルシェの劇『セ井<sup>ル</sup>の理髪師』初版…日本における《セビーリヤの理髪師》受容の諸相(4) ▼

ロッシェニ《セビーリヤの理髪師》の日本初演は大正6年(1917年)11月13日、邦題は《シキ<sup>ル</sup>リアの理髪師》。ボーマルシェの原作劇は明治時代に訳されたのでは、と思う人も多いでしょう。でも実際はロッシェニより後、大正13年4月刊のボーマルシェ『セ井<sup>ル</sup>の理髪師』(井上勇訳、聚英閣版)が最初です。

不思議なのは、この初版本が『フィガロの結婚』の題名で出版されたこと。外箱、本の背表紙、扉には『フィガロの結婚』とだけ記されているのです。でも翻訳は『セ井<sup>ル</sup>の理髪師』『フィガロの結婚』の順に両方掲載されています。その3年後(昭和2年)には、外箱、本の背表紙、扉の記載を『セ井<sup>ル</sup>の理髪師』としたものが再刊されています(扉と奥付以外の部分は大正13年と同じ)。どちらも登場人物の名前は「アルマ井<sup>イワ</sup>伯爵」「バルトロオ」「ロヂヌ」で変な気がしますが、漢字の旧字を別にすればとても読みやすい訳文です。

ちなみに次に出版されたのは岩波文庫の進藤誠一訳『セヴィラの理髪師』(昭和13年7月初版)。こちらは作者名がボーマルシェ、人物名もアルマヴィヴァ伯爵とされ、1997年の第15刷まで版を重ねたので読んだ方も多いでしょう。その解題には、ボーマルシェ原作の題名が普及したのはロッシェニの名作のおかげ、みたいな記述——「セヴィラの理髪師」は、名匠ロッシェニによつて喜歌劇に作られ、[中略]イタリア歌劇の傑作の一つとなっている。この題名が世界的に普及してゐるのは、寧ろロッシェニの名作によることの方が多いかも知れない。この点、モーツァルトによる「フィガロの結婚」の歌劇化の場合と全く同様であるのも面白い——があります(初版、142頁)。

これはあながち間違いではなく、筆者の調べでは本国フランスにおいても1819年にロッシェニ《セビーリヤの理髪師》フランス初演が行われてからあらためてボーマルシェ原作の価値が見直され、《ランスへの旅》初演半年後の1826年1月にはフランス初の本格的日刊紙『ル・フィガロ(Le Figaro)』も創刊されています。ル・フィガロはボーマルシェ原作の主人公にちなんだ命名で、毎号題字にフィガロのイラストを掲げて発行されました。



筆者所蔵『セ井<sup>ル</sup>の理髪師』聚英閣版(昭和2年)の扉と岩波文庫版の初版と、『ル・フィガロ』1826年1月20日付(wikipediaより)

本日はこれにて失礼いたします。次号は11月26日の配信とさせていただきます。

(2015年11月15日 水谷彰良)

#### ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆ガゼッタ第118号◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガゼッタ第118号をお届けします。

11月15日に配信した第117号は、11日に入稿した関係でパリのテロ事件にふれておりません。犠牲になった方々に、この場を借りて哀悼の意を表させていただきます。この悲惨な事件についてはさまざまな思いや考えがありますが、個人のブログではないので従来どおり内容をロッシェニとその周辺に絞ってお届けします。

本号は、「お薦め公演：まつもと市民オペラ《フィガロの結婚》(12月6日)！」、「2016年ROFの演目&キャスト詳細発表！」、「食べそこなったモレッタ風トルタ」をお届けします。

なお、次回例会は2016年1月17日(日)、北沢タウンホール3Fミーティングルームで行います(内容未定)。

#### ▼お薦め公演：まつもと市民オペラ《フィガロの結婚》(12月6日)！ ▼

「演出の白井晃が凄い！！我々音楽家が、いかに楽譜とらわれていたかを思い知らされました！」とのメールをソプラノの天羽明恵さんからいただきました。なんの話？と一瞬目が点になりましたが、12月6日まつもと市民オペラ《フィガロの結婚》の話と知って納得。まずは天羽さんからのメッセージを転載しますと…

今年、野田秀樹さんと白井晃さんという日本を代表する演出家が、くしくも《フィガロの結婚》を手掛けています。野田フィガロを観て喜んだ方々にも一私も観劇しました—未見の方々にも是非とも観に来て頂きたい公演が、私も出演します12月6日まつもと市民オペラ《フィガロの結婚》です！！

芝居と音楽がここまで一致したオペラが今まであったかしら？ モーツァルトが現代に生きていたら、きっと大喜びするに違いない白井フィガロです。

指揮は城谷正博さん。激しく温かく生き活きと楽譜を三次元へ、そして時空を超えて四次元の世界へと導きます。このコンビで前回《魔笛》が佐川音楽賞を受賞しています。東京から日帰り可能。美味しい新蕎麦と、紅葉の松本城が美しい季節…ぜひ皆さん、白井フィガロを観に来て下さい！！

(初役・伯爵夫人にチャレンジ中の あも〜あきえ より)

うわ〜観たいなあ、と思うのは筆者だけではないでしょう。観光も兼ねていらしてはいかが？

◎モーツァルト《フィガロの結婚》(原語上演/日本語字幕付)

日時：2015年12月06日(日) 14:00(開場13:30)

会場：まつもと市民芸術館

指揮：城谷正博 演出：白井晃 演奏：松本室内

合奏団 合唱：まつもと市民オペラ合唱団

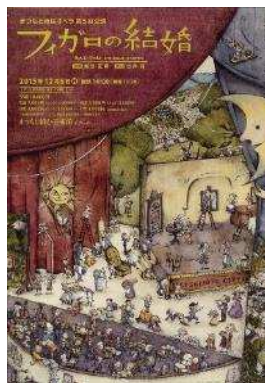
出演：太田直樹(伯爵)、天羽明恵(伯爵夫人)、九嶋香奈枝(スザンナ)、山下浩司(フィガロ)、澤村翔子(ケルビーノ)、牧野真由美(マルチェリーナ)、長谷川顯(ドン・バルトロ/アントニオ)、上原正敏(ドン・バジリオ/ドン・クルツィオ)、肥沼涼子(パルバリーナ)

チケット料金：SS 10,000円 S 7,000円 A 5,000円  
B 3,000円 C 1,000円(全席指定・税込)

お問い合わせ：まつもと市民オペラ実行委員会

(まつもと市民芸術館内) 電話 0263-33-3800

まつもと市民芸術館の公演情報はこちら→ <http://www.mpac.jp/event/12670.html>



▼2016年 ROF の演目&キャスト詳細発表！▼

来年から芸術監督をエルネスト・パラシオが務めるロッシェニ・オペラ・フェスティバル。新監督の意欲や改革は、いち早く演目とキャストの詳細を発表したことにも表れています(11月17日発表)。会期は最初の告知と同じ8月8~20日、《湖の女》のウベルトは予想どおりフローレスです。ペレチャツコ、ポドレシ、シラグーザ、スパイレス[スパイヤーズ]、シュロット、スパニョーリ、アライモら、メジャー歌手を揃えたのも新体制ならではの。アッカデーミア・ロッシニアーナの声楽コンサートも新たに加え、盛り沢山のプログラムとなっています。

◎《湖の女》新演出 8月8, 11, 14, 17日 20時開演 アドリアティック・アリーナ

指揮：Michele Mariotti、演出：Damiano Michieletto ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団

配役：Giacomo V-Uberto : Juan Diego Flórez, Duglas : Marko Mimica, Rodrigo : Michael Spyres, Elena : Salome Jicia, Malcom : Varduhi Abrahamyan, Albina : Ruth Iniesta, Serano / Bertram : Francisco Brito

◎《イタリアのトルコ人》新演出 8月9, 12, 15, 18日 20時開演 ロッシェニ劇場

指揮：Speranza Scappucci、演出：Davide Livermore フィラルモーニカ G.ロッシェニ、フォルトゥーナ M.アゴスティーニ合唱団

配役：Selim : Erwin Schrott, Fiorilla : Olga Peretyatko, Geronio : Nicola Alaimo, Narciso : René Barbera, Prosdocimo : Pietro Spagnoli, Zaida : Cecilia Molinari, Albazar : Levy Sekgapane

◎《バビロニアのチーロ》8月10, 13, 16, 19日 20時開演 ロッシェニ劇場

指揮：Jader Bignamini、演出：Davide Livermore ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団

配役：Baldassare : Antonino Siragusa, Ciro : Ewa Podles, Amira : Pretty Yende, Argene : Isabella Gaudí, Zambri : Oleg Tsybulko, Arbace : Alessandro Luciano, Daniello : Dimitri Pkhaladze

◎若者フェスティバル(アッカデーミア・ロッシニアーナ)

・修了コンサート 7月18日 20時開演 テアトロ・スペリメンターレ

・声楽コンサート 8月13日 11時開演 アウディトリウム・ペドロッティ

出演：アッカデーミア・ロッシニアーナ受講者

◎若者公演《ランスへの旅》8月12, 15日 11時開演 ロッシェニ劇場

出演：アッカデーミア・ロッシニアーナ選抜メンバー 指揮：未定 G.ロッシェニ交響楽団

◎ベルカント・コンサート

- ・Pietro Spagnoli 8月11日 16時半開演 アウディトリウム・ペドロッティ
- ・Antonino Siragusa 8月17日 16時半開演 アウディトリウム・ペドロッティ

◎愛の二重唱 (Duetti amorosi) 8月14日 16時開演 ロッシーニ劇場

- 指揮：Marco Alibrando G.ロッシーニ交響楽団
- 出演：Pretty Yende (soprano) / Aya Wakizono [脇園彩] (mezzosoprano)

◎ロッシーニマニア／魔法の輪 (Rossinimania/Il cerchio magico) 8月16日 11時開演 アウディトリウム・ペドロッティ

- 出演：Ruth Iniesta, Cecilia Molinari, Matteo Macchioni, Marko Mimica ピアノ：Carmen Santoro

◎ヌリへのオマージュ (Hommage a Nourrit) 8月18日 16時開演 ロッシーニ劇場

- 指揮：David Parry、テノール：Michael Spyres G.ロッシーニ交響楽団

◎フローレス 20 (Florez 20) 8月20日 20時半開演 アドリアティック・アリーナ

- 指揮：Christopher Franklin ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団
- Juan Diego Flórez と友情出演：Salome Jicia, Cecilia Molinari, Olga Peretyatko, Nicola Alaimo, Marko Mimica, Pietro Spagnoli, Michael Spyres

《湖の女》エーレナに今年の若者公演フォルヴィル伯爵夫人の Salome Jicia が抜擢されています。ポドレシおぼさんのチーロ再起用にもビックリ！ 演奏会が増えたので、まんべんなく見るには2巡目の11日から最終日まで10日間滞在する必要がありますね…そこが悩みの種ですが、来年も ROF ツアーを企画中です！

11月17日発表の2016年 ROF 演目とキャストはこちら↓

<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=506&ID=686&page=1>

プログラムの pdf 版はこちら↓

[http://www.rossinioperafestival.it/intra/upload/news/file/ROF2016\\_programma.pdf](http://www.rossinioperafestival.it/intra/upload/news/file/ROF2016_programma.pdf)

▼食べそこなったモレッタ風トルタ▼

オマケでロッシーニ絡みの話題をもう一つ。

8月にペーザロでオーストリア人のグルーバー夫妻から、ロッシーニの肖像が付いたケースの「モレッタ風トルタ (Torta alla Moretta)」をプレゼントされました。賞味期限は今年末、300gのずっしり重い菓子なので、勝手に焼き菓子と判断して常温保存していました。ところが先日、裏の記載を読むと「16度以下で保存」とあります。まさかと思って箱を開けると、かびがびっしり…見るも無残な姿で写真を撮る気も失せました。さすがイタリア、賞味期限の表示はテキトーで、どう考えても10度以下での要冷蔵ケーキです。

とはいえロッシーニの肖像をあしらった直径20センチ、厚さ4センチの手作りの箱が美しく、ケーキは捨てても箱は捨てられません。説明書にはやや意味不明な、「海でつらく骨の折れる仕事をする漁師たちを大いに助けしてくれるモレッタの特徴を持つ、詰め物をしたスペインのパンによる柔らかなドルチェ」の文字があります。モレッタ (moretta) とは「鳥のキンクロハジロ」「ブルネット (茶褐色の髪の毛)」「黒人の少女」を意味する言葉で、菓子の場合は「チョコレート・ケーキ」を指して使われます。

メーカーはアンコーナの「ドルチャリア・マルケ (Dolciaria Marche Srl)」。

サイトを見ると、マルケ地方のサラミ、チーズ、菓子を製造販売しており、そこに掲載された「モレッタ風トルタ」はロッシーニの肖像ではなく、漁港の風景がデザインされています。ということは、ロッシーニの肖像付きは ROF のお客をターゲットにしたペーザロ仕様かも…来年ペーザロで売っていたらぜひ買ってください。外箱はロッシーニ・ファンのコレクションアイテムです！

ドルチャリア・マルケのサイトの「モレッタ風トルタ」はこちら ↓

[http://www.dolciariamarche.com/page\\_6.html](http://www.dolciariamarche.com/page_6.html)



本日はこれにて失礼いたします。今年も残すところあと僅か。平穏無事な年末を祈るばかりです。

(2015年11月25日 水谷彰良)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
◆ガゼッタ第119号◆  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガゼッタ第119号をお届けします。

本号は、「1月17日の例会案内：スペインのロッシーニ、ラモン・カルニセールの《ドン・ジョヴァンニ》」、「ロッシーニ新譜：メトロポリタン歌劇場《湖の女》上演映像発売！」、「1月の国内ロッシーニ公演：Le voci 主催・制作《劇場支配人》&《絹のはしご》(1月16日)」、「2月の国内ロッシーニ公演：セレンディピティ・オペラ《エ

ルミオーネ》(2月28日)をお届けします。

次回例会は2016年1月17日(日)、下記の案内をご覧ください。

### ▼1月17日の例会案内：スペインのロッシーニ、ラモン・カルニセールの《ドン・ジョヴァンニ》▼

日時は発表済みですが、内容告知が遅くなりました。2016年最初の例会は、マニアックなテーマで次のように行います。

題目：スペインのロッシーニ、ラモン・カルニセールの《ドン・ジョヴァンニ》

講師：水谷彰良

日時：2016年1月17日(日)午後1時30分開始、午後4時半頃終了予定

会場：北沢タウンホール 3F ミーティングルーム (下北沢駅より徒歩4分)

地図は <http://kitazawatownhall.jp/map.html>

会員とご家族は無料。その他の方は当日1,000円を頂戴します。

内容：

ロッシーニより3歳年上の作曲家ラモン・カルニセール(1789-1855)は生まれも育ちもスペインですが、1818年に《ラ・チェネレントラ》《セビーリヤの理髪師》のバルセロナ初演に携わってロッシーニの音楽に心酔、みずから《セビーリヤの理髪師》と《イタリアのトルコ人》の差し替え序曲を作曲し、ロッシーニとモーツァルトの作品を下敷きにオペラ《エーレナとコスタンティノ》(1821年)と《ドン・ジョヴァンニ・テノーリオ、または罰せられた放蕩者》(1822年)を作曲初演しました。この例会では、アルベルト・ゼツダ指揮で2006年に行われた《ドン・ジョヴァンニ・テノーリオ》蘇演の映像をメインに、2015年出版の批判校訂版総譜も参照してカルニセールの生涯と作品を紹介します。 [講師・記]

追記：

ラモン・カルニセールって誰やねん、と皆さんお思いでしょう。オペラ・マニアでさえ初耳と断言するマイナー作曲家ですが、私は2006年に彼の《ドン・ジョヴァンニ・テノーリオ》をROFが上演すると発表したときから関心をもっていました。でもROF上演は撤回され、2006年6月9日にコルーニャのモーツァルト音楽祭で蘇演された経緯があります(演出：ダミアノ・ミキエレット、指揮：アルベルト・ゼツダ、ドン・ジョヴァンニ：ディミトリ・コルチャック)。その総譜は今年(2015年)出版されたばかり。カルニセールとその作品に関する本格的紹介もまた、この例会が日本初となるはずです。モーツァルトとロッシーニの音楽をパクった《ドン・ジョヴァンニ》。面白いかどうかは、例会に来ないと判りません。

### ▼ロッシーニ新譜：メトロポリタン歌劇場《湖の女》上演映像発売！▼

◎Rossini: La donna del lago

ロッシーニ：歌劇《湖の女》2015年3月14日メトロポリタン歌劇場上演ライブ  
ポール・カラン演出、ミケーレ・マリオッティ指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団&同合唱団  
ジョイス・ディドナート(Ms/エーレナ)、ファン・ディエゴ・フローレス(T/ジャコモ5世)、ダニエラ・バルチェッローナ(Ms/マルコム・グレアム)、ジョン・オズボーン(T/ロドリゴ)、オレン・グラドゥス(B/ドゥグラス)他  
収録：2015年3月14日ニューヨーク Waener Erato 2564605098 (2DVD)/2564604699 (BD)



2015年3月14日の上演映像。MET ライブビューイングでご覧の方も多いでしょう。メトロポリタン歌劇場での《湖の女》初上演とあって、ディドナート、フローレス、バルチェッローナ、オズボーンと最高のキャストを揃え、満を持しての公演ですから悪かるうはありますがありません。ポール・カランの演出はサンタフェ・オペラのために作られ、反乱軍にスコットランドの民族衣装キルトを着せるなどオーソドックスな作り。そこが功を奏して真っ直ぐに劇と向き合え、歌手の豊かな表情と演技も相俟って何度見ても惚れ惚れします。

フローレスのジャコモ5世はこれまで以上に精緻な声の技巧と感情表現を駆使し、決然とした高音も胸に刺さります。エーレナ役のディドナートも切れ味鋭いアジリタが素晴らしく、豊かな表情でもフローレスにひけをとりにません。マルコム役バルチェッローナの力強い歌唱、ロドリゴ役オズボーンの逞しい発声にも魅せられます。指揮者マリオッティもアクセントを個性的に強調して音楽に生気を与えます。

ロッシーニ・ファンは絶対見るはずなので、詳しくは書きませんが、筆者は第1幕フィナーレのディドナートに涙しました。素晴らしい歌手=役者がいれば、《ラ・チェネレントラ》も《オテッロ》も《マオメット2世》も《ギョーム・テル》も涙を禁じ得ません。「泣けるオペラはヴェルディから！」と宣言しちゃう人もいますが、私は違います。もちろんヴェルディにもプッチーニにも泣きますが、ベルカント脳は違う世界にも感応するのです。

日本語字幕が無いのは残念。でもいずれWOWOWが日本語字幕付きで放送するでしょう。

### ▼1月の国内ロッシーニ公演：Le voci 主催・制作《劇場支配人》&《絹のはしご》(1月16日)▼

2016年の1月と2月、若い歌手たちによるロッシーニ公演が行われます。最初は1月16日(土)の《劇場支配人》と《絹のはしご》です(昼夜公演)。



[http://www.newotani.co.jp/tokyo/xmas/dining/04\\_rib.html](http://www.newotani.co.jp/tokyo/xmas/dining/04_rib.html)

今年筆者が目にしたのはレストラン「キハチ」(Restaurant Kihachi) が12月1日から全店で始めたクリスマスコース「Chef's Best Rossini」です。コンセプトは次のとおり——「料理の創造に情熱を注いだイタリアの美食作曲家ロッシェニ。彼がこよなく愛した、トリュフ、フォワグラ、牛肉を使った代表的な料理“ロッシェニ”に、KIHACHI の7人のシェフがそれぞれの想いを込めて、世界でたった1つの一皿を作りました。シェフごとにテーマを決め、各店ごとに個性溢れる“ロッシェニ”が楽しめます。2015年クリスマス限定、KIHACHI ならではの遊び心溢れるクリスマスコースです」

[http://www.sazaby-league.co.jp/news/detail/20150909\\_restaurantkihachi/](http://www.sazaby-league.co.jp/news/detail/20150909_restaurantkihachi/)

各店7人のシェフがそれぞれの「ロッシェニ風」を創作する…そこがいいですね。筆者がそそられたのは、「白いロッシェニ」と命名した青山本店のシェフ・石川泰史によるメインの肉料理、そして「ロッシェニに捧ぐ」と命名した横浜クイーンズイースト店のシェフ・米山弘信によるメインの肉料理です。いま流行りの「クリぼっち」(独りぼっちのクリスマス) になりそうな筆者には目の毒ですが…

こちらをご覧ください→ [http://www.kihachi.jp/restaurant\\_xmas15/#](http://www.kihachi.jp/restaurant_xmas15/#)

### ▼お薦め新刊：南條年章／林康子『スカラ座から世界へ』(フリースペース) ▼

南條年章さんの名前は「南條年章オペラ研究室」の主宰者、ブッチェニ伝(音楽之友社)の著者としてご存知のことと思います。筆者はずいぶん昔から面識があり、かつて日本ロッシェニ協会の特別会員として応援してくれたことを今なお感謝しています。その南條さんの新著『スカラ座から世界へ』が発売されました(発行：フリースペース、発売：星雲社。527頁、CD付。4,000円+消費税)。

これは本当の意味で世界のプリマ・ドンナというべきソプラノ、林康子さんの輝かしい演奏活動と半生を綴った書で、南條年章の名前が大きく太字で記され、林康子さんの名前は小さく添えられているだけなので、林さん提供の資料を基に南條さんが書き上げた本と判ります。本文の随所に林さんと南條さんの回想のみならず各国の報道やその場に居合わせた関係者の証言が引用され、ドキュメントとしても価値ある本です(出演歴や本文のデータに月単位が多く、出演日が明確でない点に苦言を呈しておきますが…)

東京藝術大学を卒業し、イタリア留学してすぐスカラ座《蝶々夫人》のタイトルロールでデビューした経緯、《ウィリアム・テル》の〈暗い森〉しか勉強したことがなかったのにロッシェニ生誕180年を記念して1972年RAI主催「ロッシェニの新しい声」コンクールのソプラノ部門で優勝して一夜にして運命が変わり、ゼツダ指揮《泥棒かささぎ》現代蘇演のニネッタを歌うなど、ロッシェニ・ファンやベルカント愛好家にとっても興味が尽きません…ちなみに前記コンクールのメゾソプラノ部門優勝者がガルチア・ヴァレンティニ、テノール部門優勝者がエルネスト・パラシオ…後のフローレスの師。2016年からROF芸術監督…です。

私は20世紀のベルカント復興に果たした林さんの功績を知っていましたが、同時代に海外公演に接したことがありません。その意味でも林さんに先立ってイタリア留学し、ピッコラ・スカラ座のデビューやスカラ座研修所での試験公演を聴いた南條さん以上に林さんの足跡をリアルに、愛情込めて書き得る人はいないでしょう。本書から得られる収穫は読者ごとに異なりますが、オペラ・ファンで読んで損する人はいないと断言できますので、自信をもってお薦めします。

なお、ロッシェニと直接関係ないのでメルマガに未紹介ですが、10月に出版された長木誠司さんの『オペラの20世紀 夢のまた夢へ』も驚嘆すべき研究文献です(平凡社。メルマガ次号で紹介します)。今年下旬は日本のオペラ本の当たり年…なんて言うのも拙著も混じって恐縮ですが、出版不況の中で時間をかけて積み上げたオリジナルなオペラ文献が世に出る潮流が生まれていることを、関係者の一人として嬉しく思います。



### ▼NHK ニューイヤーオペラコンサートで《セビリアの理髪師》ハイライト! ▼

NHKのニューイヤーオペラコンサートで記憶に残るのが、ロッシェニ生誕200周年の1992年です。当時の番組ディレクターから「話を聞きたい」とNHKに呼ばれて台本を見せられ「問題があったら指摘してほしい」と言われ、「《愉快的猫の二重唱》をロッシェニ作として放送するのはマズイ」と言ったらディレクター氏が驚き、「なぜ?」「どんな根拠があって?」と訊かれました。ロッシェニの音楽の一部を使った第三者の作と説明し、これに関する資料をファクスして納得されましたが、合唱団に演奏を依頼済みと聞き、「ロッシェニ作と伝えられる、と台本の文言を変えれば充分では?」と助け船を出してことなきを得ました。

それはともあれ、2016年1月3日の第59回NHKニューイヤーオペラコンサートのチラシに「初演から200年」のふれこみで《セビリアの理髪師》ハイライトを演奏する旨が記されていました。誰が何を歌うかは不明ですが、初演200周年を記念して取り上げられるとあって、当日の放





送が楽しみです。

本日はこれにて失礼いたします。

(2015年12月15日 水谷彰良)